

本立に囲まれた放牧場で、十数羽のダチョウの群れが所在なげにうろついていた。塚本康浩さんが近づくと、ダチョウたちは恐る恐る塚本さんの手からエサをついばみ始めた。体高が2m以上もあるのに追られると追力満点だ。

「この牧場に通り始めて11年になりますが、週に1、2回しか来ないからダチョウたちに顔を覚えてもらえない。今日は、エサを持っていくから近寄ってくれただけですわ」

苦笑する塚本さんは、昨年ダチョウの卵から作った抗体で新型インフルエンザ対策用のマスクを開発した。

抗体とはウイルスの感染をブロックする力をもったたんぱく質のことをいう。ダチョウ抗体を染みこませた抗体マスクは、高致死率の新型インフルエンザの感染を高い確率で予防できる（いま話題の豚インフルエンザにも！）と考えられていて、海外からも注目されている。すでに取材は60を超え、テレビで、ダチョウ博士とダチョウを見かけた人もいるかもしれない。

肩書は京都府立大学大学院教授。小学生のときに、かわいがっていた文鳥の「クロちゃん」を踏みつぶしてしまったことがきっかけで、獣医になることを決意する。

世界一巨大な鳥であるダチ

ョウに憧れて観察を始めたのは98年。その後5年間は研究もせず、ただただダチョウを眺めていた。

「ダチョウって見ているだけで、ホッとできるんですわ。あきれれるほどアホな鳥で、自分から牧場の柵に引っかかって、首の皮がペロンと剥けてしまう。カラスの大群に尻の肉を食いちぎられているのに、平然とエサを食っていることもありです。でも傷の治りもものすごく早い。この免疫力の高さを薬に利用できるかもしれないと思って、03年から

あの豚インフルも!? 新型インフルエンザ予防の「抗体マスク」を生み出した「ダチョウ博士」が語る

ダチョウに教わった「アホガ」



ダチョウの卵とダチョウマスク。この卵ひとつから、約8万枚ものマスクを製造できる。

本格的に研究を始めました。当時は出身校・大阪府立大学の准教授だった。塚本さんのもとで鯉の研究を行っていた大学院生の足立和英さんに声をかけ、助手を引き受けてもらった。

凶暴なダチョウに襲われて

もケガをしないように、塚本さんと足立さんは白衣にヘルメットをかぶり研究を続けた。

「足立くんには、ダチョウ研究で博士号を取らせようと思っ

てました。他の先生たちには、ダチョウで博士号なんてムリだと笑われましたけど。でもがんばったかいがあって、足立くんは去年、博士号を取りました。うれしいですね」

研究には途中から他の学生も参加するようになった。ダチョウ牧場はおもしろそうだというのが動機だ。しかし、そこに集まったのは個性派ばかり……

「獣医の免許は取れたのに、人と喋るのが苦手な動物病院に勤められなかった学生とか、牧場で走り回りたいといって参加した元サッカー少年とか、足立くんも鯉の前はカエルの研究をやっていたし、ほくも含めてダチョウに興味を持つのはヘンな奴が多いんですわ」

牧場近くのコンビニや食堂に白衣姿で出没していた学生たちを見て、近所の人たちには、怪しげな新興宗教集団と勘違いされていた笑えない(?)話も。

ダチョウカ(ぢから)
愛する鳥を「救世主」に変えた博士の愉快な研究生活

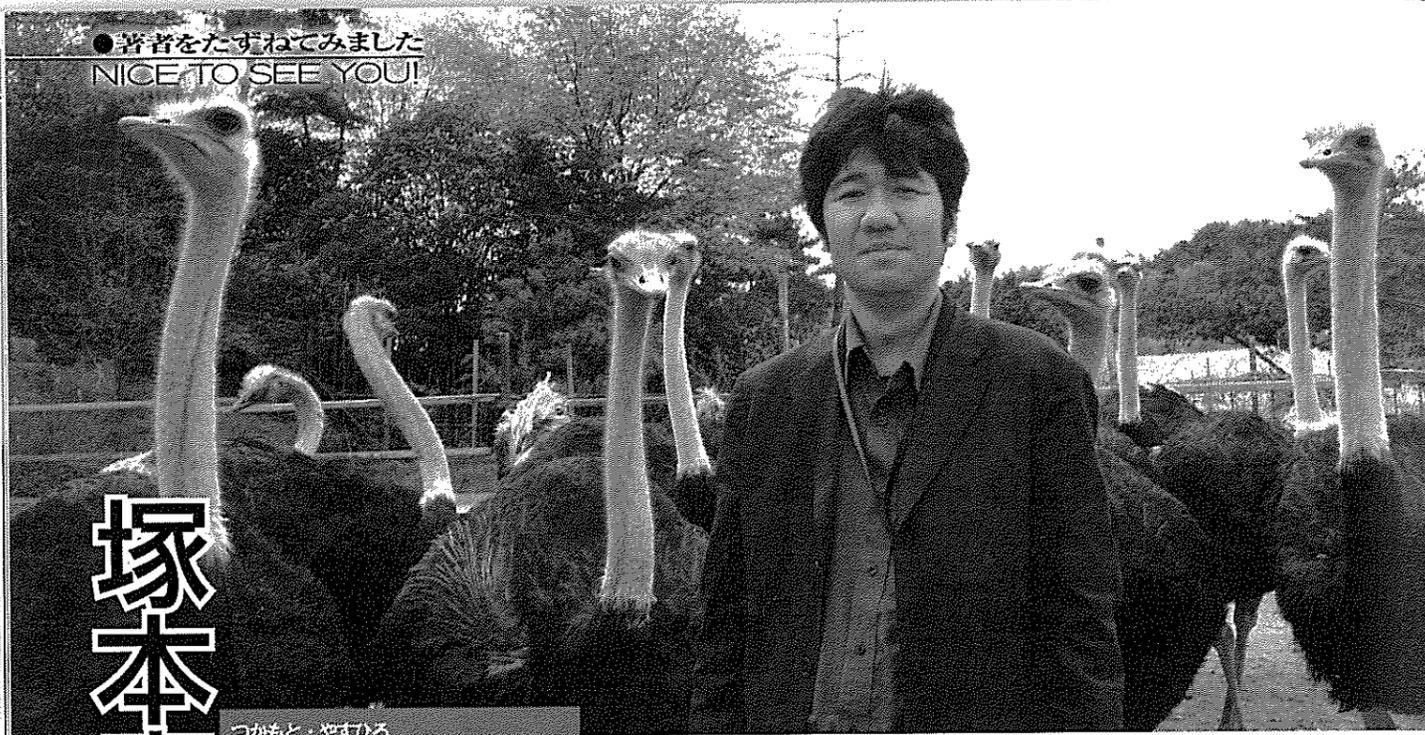
朝日新聞出版
1365円(税込み)

鳥好きが高じて獣医師になった著者。ひょんなことからダチョウの免疫力の高さを発見。「ダチョウ博士」が新型インフルエンザ予防用の「ダチョウマスク」を開発する。摩訶不思議なダチョウパワーをめぐる研究生活をつづった。勉強にもなる抱腹絶倒の爆笑エッセイ。

現在は動物衛生学などを教えている塚本さんだが、昨春まで在籍していた大阪府立大学では解剖学を教えていた。「獣医になるためには解剖実習は欠かせません。ほくらの学生時代は、興味のない実習のときは平気でサボっていましたが(苦笑)、それに比べていまの学生はまじめだし、成績も優秀です。出席率も90%以上で、サボる学生がいないんですよ」

この傾向は解剖実習にかぎったことではないという。

「文部科学省の指導で、出席日数が足りないとか試験を受けられないなど、最近の大学は高校の延長のようになってきました。出席率が高いのはそのせいかもしれません。でも、



●著者をたずねてみました
NICE TO SEE YOU!

塚本康浩さん

つかもと やすひろ
1968年京都府生まれ。京都府立大学大学院教授。獣医師。獣医学博士。小学生のときからスズメ、インコ、ニワトリなどあらゆる鳥を飼い始める。大阪府立大学農学部獣医学科に進学後はニワトリの研究に没頭。大学院時代に書いた論文が注目を集め、活躍が期待されていた。この間、臨床医として動物病院にも勤務。'98年より、フライングでオーストラリア神戸牧場でダチョウの主治医に。'08年6月に、ダチョウの卵から抽出した抗体から、新型インフルエンザ予防用の「ダチョウマスク」を開発。この抗体をもとに食中毒予防、がん治療薬美容などの研究に取り組む。

最近の学生はいわれたことしかできなくて、応用がきかないところがある」

解剖実習では血管や臓器など動物の体のすべてをつぶさに観察する。その際、「実験動物の血管の付き方が、テキストと違う」と慌てる学生がいる。

「解剖学の教科書に書かれているのは、あくまでも基本。生き物の構造は個体によって少しずつ違う。そういう、揺らぎ、があることを知らなかったという程度ならまだいいんですが、教科書が間違っているところをいう学生がいる。これには驚かされます」

もっと勉強してこいと怒鳴りたくても、学生を叱ると「授業料を払っているのだから、教員にはわかるように教える義務がある」とへ理屈を

こねられ、しまいは「アカデミックハラスメントだ」と。口撃されてしまう。さらにこんなケースもある。

「この大学にも、卒業論文に問題があって卒業させられない学生が毎年何人かいる。でも、『なんでうちの子を卒業させないのか』と、弁護士をたてて親が乗り込んでくるケースが最近増えているんですよ」

こうした、モンスターペアレントは、塚本さんの学生時代には考えられなかった。

「うちにも5才の娘がいて、わが子をかわいと思う気持ちにはよくわかります。ほくなんかダチョウに対して独占欲があつて、本を通じ大勢の人に魅力を伝えられてうれしと思う反面、ホストクラブで新人にお金をつぎ込んで大事にしていたら、人気が出て他の客にとられちゃった、みたいな気分もありますから(笑い)」

だが、と塚本さんは続ける。「学生の思考がマニュアル化して広がらないのは、いまの大人たちの干渉すぎが影響しているのかもしれないね」

学生の話題になった途端、苦笑まじりの言葉が増えた。学生時代に授業をサボり通ったパチンコ店で、パチンコ玉を目で追う癖があった。「お

かけて、顕微鏡下で動物のフンの中から寄生虫の丸い卵を見つけ出すのがほかの人より早かった」と笑う大らかさは、平成生まれの学生にはないらしい。

「ほくの学生時代は先生たちもええ加減で、おまえら勝手にやれみたいな感じでした。親もそうです。しようがないからパチンコ玉みたいに、自分こちにつつかりながら、自分こちをわし場所を探しました。ほくは臨床医にも憧れていたんで、大学院に進んでから研究生活と同時に動物病院でも働いた。新婚の嫁はんを連れて、カナダに留学していた時期もあります。そういう遠回り、に見えるいろんな経験が、結果的にダチョウ抗体マスクの開発につながったと思う」

食肉用の家畜としてはあまり役に立たなかったダチョウの秘めたる力を、異常な愛情で発見した塚本さん。最初は何からも相手にされなかったが、いまやがん治療や美容分野での研究も進められている。

「若いうちほうんと揺らいで生きる力を蓄えたほうがいい」

挫折や失敗をくり返しても、自分の興味に忠実に生きてきたからこそ、こんな言葉もぐんと重みを増す。